

読むだけで理解できる教科書

世界史読本

1

原始時代と 歴史の始まり

目次

◇ 人類の誕生

■ 文明の誕生	1
---------	---

◇ 注意すべき歴史用語

■ 文明と文化	2
■ 語族と民族	3
■ 王朝と国、領土と領域	3
■ 征服・支配・統治	4

◇ メソポタミア文明

■ メソポタミア	5
■ シュメル人	5
■ メソポタミアの統一	6

◇ エジプト文明

■ エジプト文明	8
----------	---

◇ 地中海東岸の諸民族

■ アラム人	12
■ フェニキア人	12
■ ヘブライ人とユダヤ教	12

◇ オリエントの統一

■ アッシリア帝国	15
■ 四国分立時代	15
■ アケメネス朝の統一	16
■ ペルシア戦争	17

◇ アケメネス朝の滅亡

■ マケドニアの台頭	18
■ アレクサンドロスの東方遠征とアケメネス朝の滅亡	18

参考資料

- 世界の歴史1 人類の起源と古代オリエント
- 世界の歴史4 オリエント世界の発展

◇ 人類の誕生

人類がいつどこで生まれたかは、現在のところまだ正確にはつかめていない。アフリカ東部にある巨大な断層である大地溝帯の近くのどこかで600万年前に遠い祖先がいたと思われる。しかし、この年代の数字もすでにここ数十年で700～800万年とさかのぼる可能性が出てきており、発生した場所も2001年に初期の人類の化石が大地溝帯から遠く離れた現チャド共和国から発見されたため不確かになっている。

さらに現生人類への進化の過程もここ100万間の化石発見や研究でかなり理解が進み、かつてのような猿人→旧人→新人という直線的な進化の過程は、すでに古人類学の世界では否定されている。特に、旧人の代表とされて現生人類の直接の先祖と考えられていたネアンデルタール人などは、その位置づけが微妙になっている。

現生人類は20万年前までにはアフリカで誕生し、10万年前頃にはアフリカ大陸を出て世界に広がった。彼らは各地に岩絵や洞窟画など、芸術の萌芽となる痕跡を残しながら、岩石の破片を道具(石器)として使う技術を発明し、狩猟採集生活を始めた。そしてついに人類は、1万年前頃に西アジアで「農業」を発明したのである。

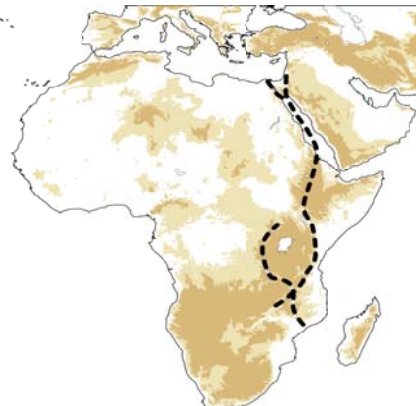
■ 文明の誕生

世界中の自然界には人類が比較的容易に手に入れられる野生の動植物が存在している。人類はそれらを採集したり狩ることによって、食べることへの不安を無くしてきた。しかし狩猟や採集は季節や日によって成果が異なるため、生活は安定しない。そこで考案されたのが「農業」だった。

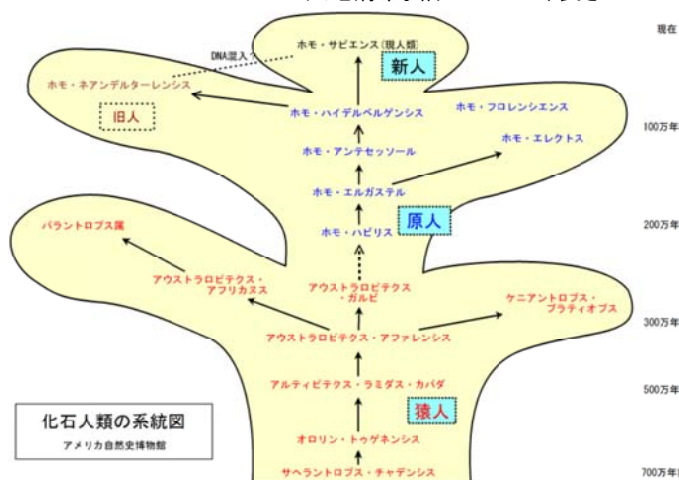
農業が始まったのは、最古の遺跡が集中している地中海東岸からイラン高原南部にかけての「肥沃な三日月地帯」とよばれる地域だと考えられている。

初期の農業は、人の行為としては穀物の種をまくだけで、あとは収穫時期を待つだけだったようである。つまりこれは、ほど良い降雨や適温を期待するだけの、自然に頼りきったものだった。こうした形態を天水農業、あるいは粗放農業といい、世界中で広く行われた。

しかしこのやり方では、収穫があまりにも天候に左



大地溝帯。幅30～60km、長さ7000km



化石人類の系統図
アメリカ自然史博物館

ネアンデルタール人:考古学的な研究の成果やミトコンドリアDNA遺伝子の分析結果から、ネアンデルタール人と現生人類は別種であることが定説だった。

しかし、1999年にボルトガルで両者の混血らしい子どもの化石が見つかり、2010年には現生人類の細胞核のDNAに、両者の混血の可能性があることが分かった。

ただしその影響はごくわずかで、この図を書き換えるほどではないようだ。

なお、猿人や原人といった用語であるが、これは日本の人類学内でだけ使われているものであり、海外では使われていない。



南フランスのラスコー洞窟壁画



ホモ・サピエンス(新人)の世界進出

右されてしまう。またこれは大地の栄養分だけに頼るために、一か所で2～3年続けて同じ作物を作ると「輪作障害」が起きるといふ欠点があった。これは大地が特定の栄養分を失って、収穫が激減する現象である。このため農地にする場所を数カ所確保し、交替で使用するのが普通であった。

こうした粗放農業の一種として焼畑農業がある。これは一定の広さの森林を焼き払うことで、作物に日光が当たりやすくなり、灰が肥料となったり土壌を中性化したりして、作物の生育に適した土地を作り出す農法である。おもに熱帯から温帯にかけての、土壌が酸性であったり植物の生育力が強すぎる地域で行われる。ただし焼き払うと言っても、せいぜい学校のグラウンド程度の面積であり、決して今日アマゾン川流域や東南アジアで行われている皆伐焼畑農法のような自然破壊的なものではない。

ちなみに農地に肥料を使う農法は、古くはそれほど一般的ではなかった。いちおう紀元前に西アジアで農業が始まった頃から、農耕に牛馬を使用する際に自然と家畜の糞が使われたり、穀物だけでなく豆類を並行して栽培する事で地味が豊かになることは、経験的に知られていたようだ。人為的に肥料が使われたのは、中国で紀元前後に堆肥や人畜糞の醗酵物が使用されたのが最初で、日本でも鎌倉時代から室町時代にかけて本格的に使われた。地中海沿岸地域でも、同じく紀元前後のローマ帝国時代には畜糞の使用が一般的であった。さらにイスラーム教の時代になった9世紀頃には三圃式農法が始まり、ここでも畜糞が有効利用された。この農法は、北ヨーロッパには12世紀頃に伝わったようだ。

農業の開始は、人間の生活を大きく変えた。農作業は種蒔き→育成（水やり）→収穫というサイクルで行われる。作業を効率的に行うには、集団で農地を耕し、さらに収穫時には一斉に刈り取って、脱穀から貯蔵までしなければならない。こうしたことがやり易いのは、集団の数がせいぜい10数人だと言われている。条件の良い場所では2～300人ほどの村落もあったらしい。しかし農耕が始まった時期の村落の規模はそんなものであった。

こうしたサイクルを始める時期を知るために暦が作られた。さらに暦を作るために天体観測が必要になり、収穫量や翌年までの食料を把握するには記録と計算が必要となった。こうして農業の開始は人間生活が一段階高度なレベルに上がる、すなわち文明が始まるきっかけとなったのである。

農業が始まると食糧に余裕が生まれ、幼児や老人にまで栄養が行き渡って人口が増えた。一方で神官や職人など、直接の食料生産作業には関わらないが、学習と経験を必要とする専門家を常置できるようになった。こうして人口が増えることは、さまざまな職業を生み、村落はやがて都市に発展した。初期には一つの都市が一つの国家だったため、都市は**都市国家**でもあった。

こうして肥沃な三日月地帯において最古の文明が生まれた。しかしそれは唯一ではなかった。続いてエジプト、さらに中国やインダスでも文明が生まれた。さらに遅れてアメリカ大陸でも生まれる。こうして各地で、次々と地域独自の文明が生まれたのである。

ちなみに古代西アジアのメソポタミアからエジプトまでの一帯を、ヨーロッパでは**オリент**地方と呼ぶ。オリентとはラテン語の**Oriens**（日の昇る方向）を語源とする言葉である。現在のヨーロッパの原型となった古代ローマ帝国には、「光は東方より」ということわざがあった。自分たちの文明が東方のギリシアの強い影響を受けたことを指すのであるが、そのギリシアの文明も、東方オリентの影響を受けていた。オリент地方は人類に光をもたらした源の一つだったのである。

さてこの後は本格的にオリентの文明の歴史に入るが、その前に重要な用語の説明をしておこう。

◇ 注意すべき歴史用語

■ 文明と文化

文明と文化は語感もよく似ていて、しばしば混同して使われる。また実際、厳密に定義することが難しい。

ムーダン：北東アジアから東アジアにかけて古くから存在するシャーマニズム系の信仰。自然界にあって人間の運命を左右する精霊の存在を認め、巫女が民衆との間を仲介する。

どちらも「人間の行動様式」ということであるが、その範囲が違う。地理学者の応地利明氏によると、文化とはある自然生態系、つまり環境に即して人間が産み出したものであり、文明とは、その生態系を越えて広がったものである。ただしこれではわかりにくいので具体例で示そう。

まず四大文明という言葉聞いたことがあるのではないだろうか。メソポタミア、エジプト、インド（イ

ンダス)、中国(黄河)の四つである。これらの文明圏に属している地域なら、そこに住む二人が、たとえ互いに言葉が通じなかったりしても、外見が似かよっていて親近感があったり、文字や記録手段が共通であったりして意思の疎通に不自由がなかったりするのである。同一文明圏では、民族や言語、文字や記録手段、信仰(世界観)、主食などに共通点がある。

しかし、たとえば前近代の中国、朝鮮、日本の3国では、信仰(仏教、儒教)、文字(漢字)、記録手段(紙)、食(麺類や米食)、さらに支配層がたしなむ教養(漢文や書・画・詩文)も共通だった。しかし宗教では民族固有の信仰が残っており、中国では道教、韓国ではムンギョ、日本では神道が根強く信仰されている。また文字でも韓国ではハングル、日本にはカナ文字がある。これらの差が総合してもたらずものが文化である。

原始社会では地域の隔絶の度合は大きく、独自性は大きかった。このためあちこちに無数に文化があった。文明も、いまではアメリカ大陸にあったことが常識であり、中国にもう一つ長江文明があったことが分かっている。もしかしたら今後も増えるかもしれない。また文明に大河の存在が必須であるとか文字の存在が必須であるというのも、アメリカ古代文明が大河流域でない所で生まれ、文字が発達しなかったり、持たなかったことで否定されている。さらにキリスト教ヨーロッパ文明や、イスラーム文明のように、旧来の文明を核にして新たに生まれた文明もある。

では文明の必須要素は何かというと、それは高度で機能的な社会、つまり地域を越えたネットワークや分業の存在であり、具体的には先述した都市の存在だろう。考古学者ゴードン＝チャイルドは文明と非文明を区別する指標として、効果的な食料生産、大きな人口、職業と階級の分化、都市、金属の加工技術、文字、記念碑的公共建造物(ピラミッドなど)、合理科学の発達、支配的な芸術様式の有無をあげている。

一般的には時代が下るほど文明・文化間で交流が進み、互いに影響し合って独自性は薄れていく。種としてのヒトは基本的に合理的なので、他の文明・文化の長所や便利なモノを取り入れるからである。特に近代以降は、通信手段や交通が発達して人とモノの交流が進んだ結果、文化の独自性すら保つのが困難となっている。このため近代においては文明・文化の独自性、たとえば少数派の言語や宗教は消えていく運命にある。

■語族と民族

古代の人間集団を区別する用語が語族と民族である。人類は肌や髪の色や体型などで少しずつ異なる点があるが、いまから80～100万年前にアフリカで生まれた単一の種ホモ＝サピエンス＝サピエンスが、世界に拡散する途中で文化や肌の色などが少しずつ変異し、その後の長い歴史の中で混じり合っただけであつた。すなわち種としては同じで、見た目だけが異なっているのである。

その外見で区別するのに使われた用語が「民族」で、言語面で区別するのが「語族」である。たとえば「インド＝ヨーロッパ語族」は、現在のインドからヨーロッパにかけて住む多くの民族が使用する言語に共通点が多いことから付けられたものである。

他の有力な語族としては、アルタイ語族がある。これはインド＝ヨーロッパ語族同様、中央ユーラシアのアルタイ山脈あたりに起源をもつ言語集団が分かれていったものと考えられており、西はトルコ語から東はモンゴル語までが属している。日本語もその影響を強く受けているようだ。ちなみに日本語はこのアルタイ語族の一員とされた時代もあったが、現在ではアルタイ語系と東南アジアの南方諸島系の言語が混じり合ったものと考えられている。

この語族と民族という用語は、語族が言語が類似した集団を表す用語であるのに対し、民族は「外見」という定義が難しい要素を使う事や、かつて19世紀から第二次世界大戦頃まで民族差別に使われた経緯から、現在では学術用語としては使われないようになっている。

■王朝と国、領土と国境、税

現代人にとって、わかりにくいのが古い時代の国の形態である。まず「王朝(○○朝)」について。王朝とはもともと、王が属する一族の系統という意味である。たとえば男子長子相続の習慣を持つ国では、王位は本家の長子が継ぐ。そして次男以降は、王族ではあるが分家となり、基本的に本家の家臣となる。例えば

フランス王家は、最初のユーグ＝カペーから最後の王ルイ＝フィリップまでずっとカペーの一族であるが、本家が14世紀初めに断絶すると、分家のヴァロワ家が本家となって王位を継ぎ、ヴァロワ朝が始まった。しかし16世紀末にヴァロワ家が断絶すると、今度はブルボン家のブルボン朝が始まった。このように本家が断絶すると、王の親族が後を継ぐ。王位が大きな一族内で移るだけだが、王朝としては別なのである。

ところで王朝は、地図の上では地理的な領域としても表される。この領域国家としての王朝が、いまの国家とどう違うのか。一般的には同じものだと思われているが、その内実は大きく違うのである。

近代国家が成立する以前、多くの国には全土の民衆を治めるための組織が存在しなかった。たとえば日本の鎌倉時代。教科書などで鎌倉幕府の組織図が書かれているのを見たことがあるだろう。しかし幕府の仕事

国境：ヨーロッパでは主権国家(絶対王政)体制になってはじめて国境が2国間で決定されるようになる。アジアでは、かなり後の時代になってからだと思われてきたが、最近の研究では契丹・宋の間の遼淵の盟(1004年)ではじめて明確な国境が規定された事が分かっている。

とは、一つは將軍直属の武士(御家人)同志の関係が良好であるように配慮し、万が一もめ事が生じたときは公正な審判を行うことであった。さらに、一致して団結する必要、たとえば軍事行動の必要が生じたときは集団をまとめる、それだけであった。幕府というものは、いまで言う中央政府のみの存在であり、領域全土を治めるものではなかった。組織図も役職の上下関係を表したものにすぎないのである。幕府の活動には將軍家の個人資産が活用され、御家人から税を徴収することなどなかった。現代のように全民衆を対象とする租税制度は、奈良時代に律令制が導入されて失敗したあとは、明治時代まで作られなかった。こうした状況は世界中どこでも似ている。

つまり地図上の〇〇朝とは、支配者集団(鎌倉幕府なら源氏や北条氏、12世紀フランスならカペー家)の権威が及ぶ領域という意味でしかない。そのため「国境」というものも、現在のような地図上に明確に線で表されるものは、ほとんど存在しなかった。基本的に近代以前は、支配者が軍務以外の仕事を家臣に強制することは難しかったのである。このため、もし支配者一族の力が弱まり、それに匹敵するような別の支配者候補が現れた場合、支配されている側の中に主君を乗り替える者が現われることもよくある。自分を犠牲にしてまで君主に尽くす事などは、よほど君主に人間的な魅力がない限り、期待できなかったのである。

たとえば12世紀中頃のフランスでは、王家であるカペー家が弱体化し、王家を見限って別の大貴族プランタジネット家に臣従する貴族が続出した。ややこしいのは、このプランタジネット家がフランスにおいてはカペー家の王以上の大領主であった上、同時にイギリス王でもあった事である。このため、地理的フランスの中にイギリス王の広大な領地が存在するという、現代では考えられない状況が生じたのである。しかしそんな状況であっても、「イギリス王」プランタジネット家の力は、家臣の領地内の民衆には及んでいなかった。くり返すようだが、イギリス王が獲得したのはフランス人貴族たちの忠誠心と従軍の義務だけであり、貴族たちが「イギリス王」に税を払う義務はなかったのである。

つまり地図上の王朝は、単に王家の権威が及ぶ範囲にすぎない。それは現在の「国境」や「領土」とは異なるものなのである。つまり前近代の国とは、支配者層の上下関係の中で生まれた、「国のようなもの」でしかなかった。それがいまのように、民衆の生活にまで直接影響を及ぶようになったのは近代以降である。

■ 姓と名

今日ではほとんどの国の人間が姓と名を持つのが当然と考えられているが、歴史的にはそうでない。日本を例にあげると、古代においては個人を特定する名称としては「名」しかなかった。もちろん支配層には、父系の同族集団名「氏」や、天皇制における役職名「姓」があり、支配層内部では「氏」または「姓」に「名」が付けられて呼ばれた。例えば蘇我という氏に属する馬子さんは、漢字では蘇我馬子と書くが、呼称は「ソガのウマコ」である。これはソガ一族のウマコという個人を表し、他の一族のウマコと区別するのである。今日でも天皇家の人々が名だけで姓が無いのは、区別する必要が無い一族だからである。

しかし時代が下って一族の規模が大きくなり、氏・姓だけで区別が難しくなると、今度は身近な小集団の居住地や目立つ邸宅などの名を氏姓の代わりに使うようになった。これが苗字(名字)である。例えば瀬田の唐橋のムカデ退治伝説で有名な弓の名人田原(俵)藤太は、姓名(公式名)は藤原秀郷だが、現在の滋賀県湖南市「田原(俵)」に領地を持つ「藤」原氏の長男(太郎)なので、全てを表す通称名として「俵藤太」と呼ばれたのである。彼の場合、苗字が田原で、姓は藤原である。日本史の教科書では基本的に公式名称で表すので「藤原秀郷が平将門を討った」と表現する。

また他にも特殊な名前として、法名がある。僧侶は出家すると、生まれ変わったとされて俗名を捨てねばならず、新たに法名を師から授けられて名乗るのである。

ちなみに現代の日本では法律上、氏・姓・苗字を区別していない。それが一般的になったので、日本史を学ぶ時に少し混乱する原因になっている。

なお「名」は親がつけるが、実際には親や君主以外の他人がその人を名で呼ぶことはなく、本人が選んだ別名「字【アザナ】」で呼ばれた。その理由は、たとえ名を知っていても、それを口にするのは本人を霊的に支配する事を意味し、非常に失礼な事だと考えられたからである。このため本当の名を口にすることは避けられ（古語で忌【イ】むという）、「名」は諱【イミナ】とも呼ばれた。

王や皇帝など偉大な人物になると、死後に生前の功績を考えた特別な名前「諡【オクリナ】」で呼ばれた。さらに彼らには、王朝一族の霊廟に祀られる時の名前「廟号」さえあった。例えば中国清王朝の乾隆帝は、姓が愛新覚羅、諱が弘曆、諡が純皇帝、廟号が高宗であるが、一世一元であったため、これらのどれでもなく元号の乾隆でよばれるのが教科書では一般的である。ややこしいがどれも本人を表す名称なのである。

曾祖父の時代：本当ならビル＝ゲイツの本名は4世となるはずだが、父が〇〇世という、金持ちの名家特有の名前でよばれるのを嫌い、3世という呼称を名乗らなかった。それで「3世」が本来4世である曾孫に回ってきたのである。

なおヨーロッパやイスラーム圏では、個人名の後に父系一族の名を付けるのが一般的である。また個人名には聖者の名をつける事が多い。

例えばフランスのカペー朝ではフィリップ王が五人もおり、次のヴァロワ朝でもシャルル王がやはり五人いる。特に14世紀後半から15世紀末にかけては、五人の王のうち四人までがシャルルであった。現代でもマイクロソフト社の創業者ビル＝ゲイツ氏は本名がウィリアム・ヘンリー＝ゲイツ（3世）であるが、曾祖父の時代からウィリアム・ヘンリー＝ゲイツが続いているのである。

また聖者の名も、同じ人物が各国語で少しずつ異なってよばれる。例えばヘブライ人の聖ペテロは、ラテン語ではペトルス、英語ではピーター、ドイツ語ではペーターまたはペーテル、フランス語ではピエールで、イタリア語がピエトロまたはピエロ、スペイン語はペドロで、アラビア語ではブトロス、ギリシア語でペトロス、ロシア語でピョートル、オランダ語でピーテル、セルビア語でペータル……キリが無いのでここまでしておこう。

聖者の名前のついでに、カトリック文化圏や東方教会圏では一年365日のそれぞれに聖者の名がつけられている。例えば1月1日は聖母マリアの日で、12月3日は聖フランシスコ＝ザビエルの日、12月6日は聖ニクラウス（サンタクロース）の日、12月25日は主イエスの降誕（誕生）の日、などである。プロテスタント圏ではこうした聖者崇拜と関わることは行われていないが、Name Dayと言って365日それぞれの日に名前をつける習慣は残っており、子どもの誕生日についていた名前を個人名にする親もいる。

イスラーム圏の人の名前は、アラブ人の影響で個人名に父、祖父の名を連ねていく（祖父の代わりに父方の先祖の有名人の名をつける事もある）。たとえばムハンマド＝アハマド＝アリー氏なら、本人の名はムハンマド、父はアハマドで、祖父がアリー。これに加えて通称や一族の職業名、さらには祖先一族の尊称などがつく場合もある。ムハンマド＝イブン＝ファリドなら（有名な）ファリドの子孫のムハンマドという意味である。イブンをビンと表す場合もあり、テロ組織アルカイダの創始者として有名なウサマ＝ビン＝ラーディンはラーディン一族（サウジアラビアの大財閥）のウサマという意味である。

またヨーロッパでは、貴族の場合は主要な領地の名前が付けられた。このため公式名称に所有を表す接続詞、つまり英語ではof、ドイツ語でvon、フランス語でdeが付いている場合、その人が貴族出身者であることを表す。例えばCatherine of Aragonキャサリン・オブ・アラゴン（ヘンリ8世妃）、Jeanne d'Arc（ジャンヌ・ダルク）、Otto von Bismarck（オットー・フォン・ビスマルク）などである。

これはイスラーム圏でも似た習慣がある。有名なウラマー（法学者）は、ウラマーと認定された後は本名で呼ばれずに、出身地の名をつけてよばれる。例えばイラン・イスラーム革命で活躍したホメイニ師は、アヤトッラー＝ホメイニが正式な呼称であるが、本名はルーホッラー＝ムーサーヴィーでイランのホメインの町で生まれた。ルーホッラーが個人名で、ムーサー（聖書のモーセ）の子孫の一族と言う意味である。それが学者となって、ホメイニ出身者という意味で語尾に-iがつき、ホメイニとよばれるようになったのである。その後彼は、法学者の最高権威（アーヤトッラー）となったので、単なるホメイニからアーヤトッラー＝ホ

メイニとよばれるようになったのである。

多くの文化圏では男性は結婚後も姓を変える事はないが、女性が姓を変える事は珍しくない。ただしそれは、単に本来の姓名に夫の姓をつけるだけであったりして、元の姓名は何らかの形で残されるのである。日本のように完全に元の姓が無くなる（正確には元の姓か夫の姓の二者択一になる）形は珍しい。これは現在の制度ができた明治以降の日本では、妻が夫の「家に入る」という形で、完全に夫の家の一員となるとされたからである。同じ儒教国家でありながら、中国や韓国では、妻は夫の家で同居しても実家の姓が残り、完全に同化することはないのとは対照的である。

ちなみに、一般的な教科書では歴史上の人物は苗字もしくは名のみであったり、苗字と名の両方で表す事が多い。また名前の各要素をつなぐ記号も、新聞や書籍では「・」が使われる事も多い。

しかしこの本では人名は基本的に()=()つまり苗字と名を「=」でつなぐ形で表現する。その理由は、まずこの「=」記号でつなぐのは教科書で一般的だから、それに揃えたということである。また人物を全て苗字と名前で表す事は、歴史上の人物は王も民衆も同格に扱うという意味を込めている。

◇メソポタミア文明

■メソポタミア

古代においては、どの地域でも農業を行う上でさまざまな困難を抱えていたが、中には肥料の問題や土地を新たに開拓する苦勞がほとんどない地域も存在していた。人が少し手をかけるだけで、肥えた土地で作物が作れるという夢のような土地。その一つがティグリス・ユーフラテス川に挟まれた「メソポタミア」だった。メソポタミアとはギリシア語で、meso（中間の）+potam（河）+ia（土地）つまり河のあいだの土地を意味する。この地域は名前の通り兩大河に挟まれていた。

この二つの河の上流の山岳地帯に冬に降った雪は、春とともに溶けて川に流れ込む。

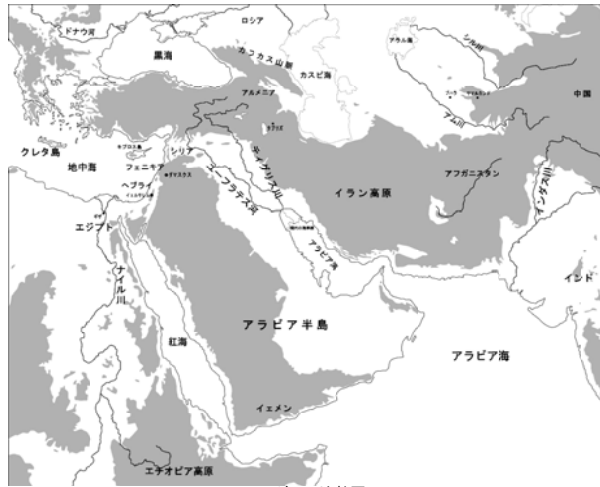
下流域では5月から6月にかけてが増水のピークとなる。下流では上流から流れてきた土砂が川の両側に積み重なり、自然に堤防が形成された。長い間に堤防は高くなり「天井川」とよばれる地形になる。しかし、たまには水量が多すぎる時もあり、そうした場合はどこかの地域で堤防が決壊して洪水になる。そしてあたり一面が泥の海となるのである。現代なら不幸な出来事として、「大自然の脅威」「被害総額〇〇億円」などの見出しが新聞に躍るかもしれない。しかし当時の人々にとっては、こうした光景は大変ではあるが定期的に予想がつき、自然の恵みがもたらされる現象であった。

泥は上流域から大量のミネラル（鉱物性の栄養分）を運んでくるが、これは天然の肥料である。洪水は一年のうち決まった時期に起こるのだから、逃げる事は難しくない。そしてやがて水が引いて泥が乾けば、そこには一面の農業適地が広がっているのである。あとはそこに線を引いてだれがどこを耕すのか決め、水をやる（灌漑という）設備を使うだけで十分なのである。ただしこれが難しい。土地の線引や復元は、一斉にやらないと不平等になるからである。トラブルが起きることもあるだろう。したがって、こうした場面をうまくまとめられる人物が必要になってくる。それが「王」であった。

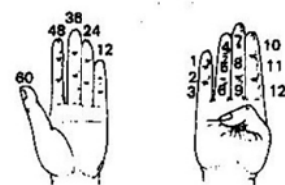
■シュメル人

古代メソポタミアで最初に文明を築き上げたのがシュメル人だった。彼らの言葉は周囲のセム語族（いまのアラビア人と同系統の言語を話していた民族）とは異なっていたようだ。彼らがいつ頃メソポタミアに住み着いたのかははっきりしない。彼らの文明が残したもの以外、詳しいことはいまでもわかっていない謎の民族なのである。彼らは世界最古の文字である楔形文字を発明し、それを記録する手段である粘土板を発明した。メソポタミアの諸民族、たとえばこのあと登場するアッカド人やアッシリア人に、シュメル人が与えた影響は非常に大きかった。そのなごりは現代にまで及んでいる。**粘土板と楔形【クサビガタ】文字**という記録手段のセットは、世界最古の方法として西アジア中に普及し、二千年後のアケネメス朝バビロニア帝国の時代まで公式の記録手段であり続けたのである。

他にもシュメル人は、洪水の後の土地の区画割りを正確に行う必要から発明された**測量術**、さらにはそれを使いこなすための数学や**太陰暦**、そして**六十進法**（六十が1時間など。片手の指5本と、反対の手の親指以外の関節12カ所数える）を発明している。太陰暦とは月を基準とした暦



西アジアの地勢図



60進法の数え方

で、月の30日周期を一か月とする。しかし、一年は365日なのでどうしても30日では割り切れず、5日だけ余分になってしまう。そこでシュメル人はこの5日間を十三番目の月として年末に置き、不吉な月だとしてなるべく外出を控えたという。世界にいまでも残る13を不吉とする迷信はこれが原点らしい。

ただし太陰暦といっても、農業には太陽暦の方が都合が良いので、太陽の周期（1年365日）を組み合わせさせて使っていた。このため正確には太陰太陽暦という。

シュメル人で最も有名な人物は、**ギルガメシュ**である。かつては完全に神話の中の、想像上の人物と考えられていたが、現在ではだれか実在の（恐らくは複数の）人物を反映していると考えられている。ギルガメシュは都市国家ウルクの王で、父が人、母が神という半人半神で、さまざまな冒険を行った。不老不死の方法を探す話。森に潜む怪物を倒す話。さらには冒険の中で、かつて世界を襲った大洪水の話が語られるが、それが聖書にある有名なノア方舟の物語の原型になったのではないとも考えられている。メソポタミアではウルク以外にも、ウルやアッカドといった都市が有力で、紀元前二千年頃まではこの地域の覇権をめぐる都市国家が争う状態が続いた。

■メソポタミアの統一

はじめてメソポタミア全域を支配したのはシュメル人ではなく、その北方アッカド地方に住むアッカド人だった。紀元前2300年頃の**サルゴン**王の時に有力となり、大帝国を築いた。最も力があつたときは地中海にまで力が及んだらしい。しかしこの国は、彼の孫の代から弱体化してしまったようだ。

その後、紀元前1790年頃にメソポタミアを再び統一したのが、アッカド人と同じセム語族に属するアムル人の都市国家**バビロン**の古バビロニア王国（**バビロン第一王朝**）の王**ハンムラビ**である。**ハンムラビ法典**の制定者として知らない人はいないだろう。

この法典は楔形文字で書かれ、バビロン市の主神マルドゥクの神殿に置かれていた。これが1901年に発掘されたとき、人々を驚かせたのがその内容だった。法典196条に書かれた有名な文「もしある市民が、他の市民の目をつぶすならば、彼の目をつぶさなければならぬ」は、キリスト教徒ならだれでも知っている『旧約聖書』の文言「命には命で、目には目で、歯には歯で、手には手で、足には足で、火傷には火傷で、傷には傷で、打ち身には打ち身で償わなくてはならぬ」と同様な内容であり、しかも旧約聖書よりはるかに古いことが明らかであり、聖書が原典でなかったことが分かってしまったのである。ちなみにこの文言は以前では、「目には目を、歯には歯を」の表現で、復讐を意味する表現として世界中で使われている。

古バビロニアでもう一つ有名なのが「**バベルの塔**」である。これは聖書に記述された伝説上の建物で、かつて同じ言葉を話していた人々が、神を恐れずに協力して巨大な塔を建てて神（天空）に近づこうとしたため、神の怒りで塔は崩れ落ちてしまった。おまけに人々は、言葉が互に通じなかったのに気づき、大混乱におちいったというものである。このため、いまではバベル＝混乱という意味で使われている。

現在ではバベルの語源はアッカド語の**バブ・イル**＝神の門、



ハンムラビ法典



バベルの塔(ドレ画)



修復されたウル市のジグurat

もしくはそれを語源とするバビロン市だと考えられている。バベルの塔も古代メソポタミアでは少し大きな町ならどこにでもあった宗教施設**ジググラト**がもとになったのだろうと考えられている。

古バビロニア王国はハンムラビの後はいよいよ衰退し、前1600年頃にイラン高原から侵入したカッシート人の活動もこれを加速した。このカッシート人というのも正体不明である。

やがて古バビロニア王国が滅亡した後、メソポタミアの覇権を握ったのは、北方のアルメニア高原に本拠地を置いていたミタンニ王国と、西北のアナトリア半島（いまのトルコ）に本拠地を置いていた**ヒッタイト王国**だった。ヒッタイトは、古代オリエント地方ではじめて鉄の製造法を握っていた国として有名である。もっともこれはヒッタイトの発明ではなく、彼らが支配した先住民から受けついだものらしい。

ヒッタイトもミタンニも、その言語がインド・ヨーロッパ系であることがわかっている。後で述べるが、紀元前18世紀頃から何からかの原因で、カスピ海から黒海の北のあたりで遊牧生活を送っていたインド・ヨーロッパ語族が活発に移動を開始しており、インドからヨーロッパにかけての文明世界に侵入をくり返している。ヒッタイトやミタンニの出現は、そうした大きな民族移動の一環だった。

鉄の製法を独占していたヒッタイトの軍事力は非常に強力だった。そしてこの頃シリア地方まで進出してきたエジプト新王国と、オリエントの覇権をめぐる激しく争った。紀元前1286年のカデシュの戦いではエジプトと互角に戦い、引き分けに終わったことがわかっている。この際に結ばれた和平条約は、世界最古の国際条約と言われている。

ところが紀元前12世紀初め、そのヒッタイトが突然滅亡してしまう。これも原因ははっきりしていないが、首都のハットゥシャ（現ボガズキョイ村）は、跡形もなく破壊されてしまったらしい。発掘されたボガズキョイの遺跡には大量の炭化物つまり燃えかすが含まれており、破壊の激しさを物語っている。

オリエント最強の軍隊を率いたヒッタイトを滅亡に追いやったのはどんな勢力だったのかは、長い間謎だった。ようやく最近わかってきたのは、それが当時「**海の民**」と呼ばれた勢力だったということである。この紀元前12世紀頃というのは、長く続いた温暖期が終わり、寒冷化に向かった時期である。このため世界中で北方に住んでいた民族の移住が始まり、それが玉突き現象的に他の諸民族を押しやったのである。押した側も押された側も、生きていくためには戦わねばならない。押した側は避難民だが、押された側からすれば侵略者でしかない。当時の記録で「荒々しい」「野蛮な」と形容される「海の民」とは、現代で言えば、環境難民であった。

さらにこの「海の民」というのは単一民族や単一勢力なのではなく、複数の民族集団の総称らしい。彼らは突然現れ、各国の防衛力の薄い部分から進入を試みた。戦争なら次の一手が読むこともできるが、無計画な侵入を防ぐのが難しいのは、史上最強の軍事国家である現代のアメリカ合衆国がメキシコ国境からの難民の侵入を防げないという例でもよくわかる。彼らの破壊力はすさまじく、ヒッタイトだけではなく、エジプトでもメソポタミアでも大なり小なり彼らの影響を被っているといったら良いだろう。

◇エジプト文明

■エジプト文明

ここで目を西に転じて、エジプトの古代文明について見ていこう。

現在のエジプト人は民族的にも言語的にも文化的にもアラブ化（セム語化）しているが、紀元前3000年頃はアラビア語とは別系統である、エジプト語を話す**ハム語族**であった。

エジプト語：現在ではキリスト教の一派コプト派の典礼用言語コプト語としてわずかに残っている。エジプト語もアラビア語も、言語の系統は違うが、発音や文法が似ているためと、エジプト人がイスラーム化したため、セム化した。

この頃のエジプトは、メソポタミアの両大河と同様に、定期的な氾濫と洪水をくり返す**ナイル川**のおかげで、ほぼ同時期に古代文明を生み出した。このナイル川がティグリス・ユーフラテス川と違うところは、川の長さをはるかに長大で、地面の傾きもゆるいため、氾濫と洪水がゆるやかに始まってゆるやかに終わることであり、天井川にはならず、洪水もはるかに規則的だった。洪水の始まる時期は、全天でもっとも明るい恒星おおいぬ座の主星シリウスが明け方に現われる時期（夏）であり、非常にわかりやすかったのである。このためシリウスを観察することから、天文学が非常に発達し、高度

な計算から導かれたカレンダーである**太陽暦**が生まれた。さらにメソポタミア同様に洪水後の土地の割り振りの必要から**測量術**や**数学**も発達した。たとえば辺の長さが3：4：5の三角形は直角三角形であるという知識を世界ではじめて発見したのがエジプト人であると言われている。

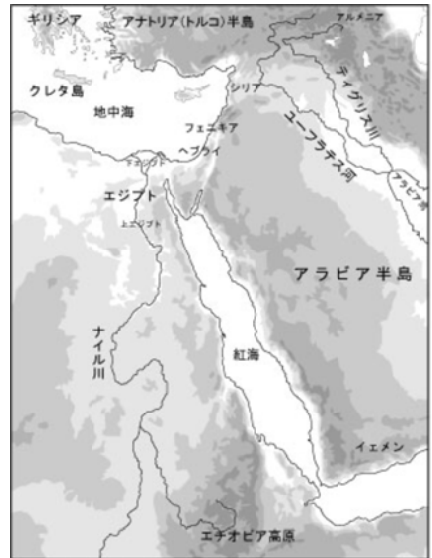
ナイル川がもたらす収穫は、メソポタミア以上のものがあり、ほとんど肥料をやることなしに多くの収穫が得られた。これは古代から現代まで一貫しており、地中海世界を制覇しようとする勢力は、いかにしてエジプトを征服・支配するかを重視した。実際、後のローマ帝国などは、エジプトからの収穫だけでもかなりの人が食べていけたのである。

前3500年ごろにはナイル川流域の各地に**ノモス**とよばれる小国家が成立した。やがて、より効率的な治水の必要から、エジプトでも統一国家が出現する。

エジプトはまず、ナイル川河口の三角州の下エジプト地域と、その上流の上エジプト地域の2つの文化地域に、それぞれ下エジプト王国と上エジプト王国が成立した。これらをはじめて統一したのが伝説的な**ナルメル王**（ギリシア人によればメネス王）である。こうして**エジプト古王国**が始まった。

古王国という名前は正式名ではない。エジプトは、最初から最後まで、計20の王朝が興亡をくり返した。これをエジプト学者は大きく特徴ごとに分類し、**古王国・中王国・新王国**と区分した。ただしこの間に名称が変わるわけではない。また、この3時代の間にはそれぞれ第1中間期、第2中間期とよばれる混乱した時代があった。

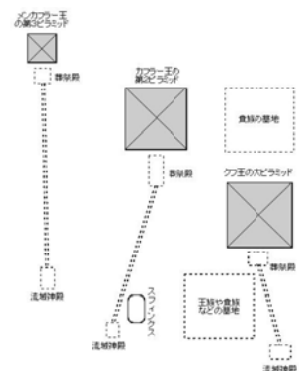
古王国の最盛期は第4王朝の**クフ王**時代で、これを象徴するのが**大ピラミッド**である。いまやエジプトの象徴、そして観光地として有名になったこの建造物は、長く国王（**ファラオ**と呼ばれた）の墓と信じられてきたが、「墓」の一部と言った方が正確である。確かにピラミッドは初期のものはファラオの巨大な墓標であったが、最も有名な三大ピラミッドについては、



直角三角形の発見：最近の研究ではメソポタミアのほうが早かったらしい。



ギザの三大ピラミッド(上)と平面構造図(下)



なぜこんなに巨大なものを作らねばならなかったのか、未だに確定した説はないのである。確かな事は、何かファラオにとって意味がある記念碑的なものであることだけである。ファラオの墓自体は、一般的にはピラミッドの近くの地下に葬祭殿の一部として作られており、王の**ミイラ**もそこから発見されている。

また、ピラミッドの側にある有名な**スフィンクス**だが、これは王の守り神として置かれた神像である。一時はピラミッドより古いという説もあったが、最近の研究では三大ピラミッドの一つ作ったメンカウラー王が作らせたという説が有力である。

ピラミッドの存在は古代ギリシア時代からよく知られ、その巨大さと建造法の不思議さから、古代の「世界七不思議」の一つとされた。また後にはピラミッドには不思議な力が込められているという信仰が生まれた。中世ヨーロッパではミイラに不老不死の力があるとされ、これを粉末にしたものが高価な薬として取引され、多くの病人の胃袋に流し込まれた。また、葬祭殿には高価な宝物が納められていたことから、古代から盗掘が横行し、新王国時代にはファラオの墓が意図的に隠されるようにもなった。有名な**ツタンカーメン王**の墓は、これに成功した数少ない成功例であり、現代になって発見されたものである。

現代においてもピラミッド信仰は残り、「ピラミッドパワー」として有名になっている。これはピラミッド型の四角錐の金属のパイプを組み合わせた構造物の中に物を置くと、細菌の繁殖が抑えられて腐敗せず、生命力が活性化して植物の生育が促進され、精神集中がしやすくなる等の効果があるとされている。生命力が活性化されるのなら細菌の活動も活発化して腐敗や悪臭がひどくなりそうなものだが、なぜかそうはならない。一部の怪しいビジネスをやっている人にとって、とても都合の良いパワーである。

ファラオの葬祭殿の壁には一面に文字が描かれた。これが古代エジプト文字の**神聖文字ヒエログリフ**である。象形文字の一種で、何が元になったかわかりやすい。

たとえば漢字の「乙」を横に引き延ばしたような文字は、角の生えた毒蛇（ツノクサリヘビという毒蛇がモデル）を表わす文字で、fの音を表す。後には母音を表わす文字もできるが、一般にヒエログリフは子音のみで、母音はない。実際に発音する時には母音を補って発音するのだが、補い方はエジプト人ならだれでもわかるため、省略されたようだ。つまり、ヒエログリフは、エジプト人によるエジプト人のための文字であり、他民族が使う事など考えていないのである。



ツノクサリヘビ

母音は無い:現在のアラビア文字も母音を示す文字がなく、子音に記号を付けて表す。しかしこの記号は学習用で、普通は省略されるため、実質的に子音のみの表記となっている。

こうした事情で、現代人が解読を試みたときには大変だった。ようやくヒントがつかめたのは1799年。有名なナポレオン率いるフランス軍がエジプトを占領していたとき、偶然**ロゼッタストーン**石碑を発見した。これにはギリシア文字と2種類の古代エジプト文字（神聖文字ヒエログリフとその簡略形である**民衆文字デモティック**）が彫られていたため、これが手がかりとなって23年かけてフランス人の学者**シャンポリオン**によって解読された。

古王国は紀元前22世紀中ごろに崩壊し、全国に混乱が広がる第1中間期となった。日本で言えば戦国時代のような時代である。ファラオもこの頃は下層民出身者や軍人出身者が現れ、明らかに古王国時代とは違った時代となっていた。

そのエジプトが次に統一されたのが前21世紀中頃だった。エジプト中王国の始まりである。首都は上エジプトの**テーベ**市に置かれた。中王国は地方豪族の連合体という性格を持っており、ファラオの権限は古王国時代と比べると弱かった。また官僚組織が整備され、神官勢力との二本柱が確立して政治は安定したが、これも王権の弱体化につながった。紀元前18世紀初めにエジプトは王朝の断絶をきっかけに再び分裂の時代を迎える。第二中間期とよばれる混乱期である。

ヒッタイトのところで述べたように、この頃アナトリア半島からシリア周辺にかけてはインド＝ヨーロッパ語族が、さかんにメ



ロゼッタストーン

ソポタミアや地中海東岸地方に民族移動をしており、その波がエジプトにも及んだ。

ヒクソスとよばれる集団が登場し、ナイル川デルタ地帯に侵入して征服したのである。彼らはさまざまな民族から構成されていたらしく、フェニキア地方の信仰をエジプトにもたらしている。のちに彼らを撃退してエジプトを再統一したエジプト新王国は、ヒクソスは武力に優れていたが野蛮な民族で、エジプト人の多くが奴隷にされたと記録しているが、これは新王国による宣伝の要素が強く、現在では否定されている。しかし彼らが新しい武器をエジプトにもたらしたことは確かである。それは「戦車」であった。

これは現代の人間が思い浮かべる戦車ではない。

現代のものは分厚い鉄の装甲におおわれた台形の戦闘用車両を指すが、古代のものは二つの車輪を持ち、数頭の馬に引かせて人が弓を射るための軽車両である。両者は日本語では同じ「戦車」という言葉を使うが、英語では現代のものをタンクtank、古代の二輪馬車をチャリオットchariotと区別している。ヒクソスを撃退したエジプト新王国は、彼らからこの新兵器を学びとって戦ったのである。



ヒッタイトの「戦車」

しかしその後も新王国がヒクソスの侵入を防ぎ続けるためには、彼らの拠点である地中海東岸地方を制圧しなければならない。となれば、地中海地方の勢力とも関係が必要である。これは、この地方に覇権を及ぼしていたヒッタイトやミタンニには脅威であった。こうしてエジプトは、なしくずし的にこうした勢力と対立することになったのである。

新王国において、はじめてこの地方の覇権を握ったファラオが**トトメス3世**だった。彼の時代にはシリアまでが征服され、エジプトの領域は最大となった。そのうえ、彼はこれら地域の首長の後継者をエジプトに強制的に留学させ、エジプト式の教育を施した。これはこうした地域に、親エジプト勢力を作り上げるためであった。このため、のちにこうした外交政策を怠った**イクナートン王**の時代に、この地域にヒッタイトの圧力がかかってきたときも、これらの首長はできる限りエジプトに忠実であろうとしたのである。彼の政策はしっかりと実を結んだのだ。トトメス3世は外交というものを理解していた。外交とは外交官だけがやるものではないのである。

トトメス3世の死後、2代おいて登場するのがアメンホテプ4世である。すでにトトメス3世の頃からエジプトでは、深刻な国内対立が始まっていた。広大な領域を支配して力を増したファラオの力を背景に、ファラオと家臣団は、エジプトを支える両輪の片方である神官勢力から権力を奪い、専制君主政をめざす動きを強めたのである。そしてこれを完成しようとしたのがアメンホテプ4世だった。ちなみにアメンホテプとは「アメン神が満足する」王、つまり神にとって「君がファラオなら私は満足だ」という意味である。アメンホテプ4世が属する第18王朝は、他の王朝にも増してアメン神の影響が強く、そのため神官勢力が国政に与える影響もどの王朝よりも強かった。彼はこれを変えようとしたのである。当然神官たちは抵抗した。そして「**アマルナ革命**」が起こった。

紀元前14世紀の半ば、アメンホテプ4世は突如名前を**イクナートン**と変えた（正確にはアクエンアテン。「アトン神に愛される者」という意味である）。彼は、太陽の光輪を神格化した神にすぎなかったアトン神を、新たな主神としたのである。そしてファラオはアメン神を見捨てた。首都もアメン神官の勢力が強い従来の**テーベ**から、新たに作られたアクト・アトン（いまの**アマルナ**市）に移した。さらに彼は、アトン神以外の神の崇拝も禁止し、アメン神の神殿を破壊し、その名を記録から削るなど、革命を徹底化した。このため、革命初期には神官団の横暴に不満を持っていた人々も、あまりの過激さを嫌って都から去っていった。イクナートンは明らかにやりすぎた。王は、人が減って寂しくなった都で亡くなったらしい。

イクナートンを継いだのは、子のツタンクアトン（「アトン神の生きた似姿」という意味）だった。ツタンクアトンは都をテーベに戻し、名前もアメンにちなんだツタンクアメン（**ツタンカーメン**）と変えた。もうおわかりだろう。現在大英博物館の宝物中、もっとも人気のある展示物の一つの黄金のマスクの主は、こ

の事件の関係者なのだった。

彼はそれほど力があった王ではなかったらしく、19年という短い人生だった以外、死因さえはっきりしない。墓が発見されなかった理由も、王が急死したため葬祭殿さえ作れず、彼を支えていた貴族が自分用の小型の墓を転用したため王墓と思われなかったのと、もう一つは王墓が非常に巧妙に隠されていたためであった。このため1922年に考古学者ハワード＝カーターによって発見されるまで、ツタンカーメンの墓は隠され続けたのだった。

ツタンカーメン王については、「ファラオの呪い」の話が有名である。発掘資金のスポンサーとなった英国貴族カーナヴォン卿をはじめ、発掘の関係者が次々と急死したためマスコミがたてた噂が広まったものであるが、実際の死者はごく少数であり、呪いというほどの規模ではない。カーナヴォン卿も平均寿命が50歳前後の時代の、57歳での病死であった。第一、もっとも呪いを受けるべき立場のハワード＝カーターはその後活躍し、当時としては長命の66年の生涯を全うしている。

イクナートン時代の混乱を経験したにも関わらず、エジプトはまだ強力だった。イクナートン時代には外交まで手が回らず、地中海東岸地域はミタンニヤヒッタイトといった勢力の草刈り場となった。しかしその後エジプトは再び勢力を回復し、半世紀後には再びこの地域をめぐる主導権争いに加わるようになった。

その後のラムセス2世時代には、シリア地方の覇権をめぐって、ヒッタイトと何度か激戦をくり広げることとなり、先述した世界最古の戦争記録が残されたカデシュの戦いが行われ、多くの神殿に勝利の記録が残されている。ただ実際にはこの戦いは引き分けであり、エジプト側の勝利のみを記録した、自国にとって都合の良いものだった。いまでも昔も政府というものは自己宣伝をするものなのである。

ちなみに、世界遺産に指定されている**アブシンベル神殿**は、彼の業績を称えるために造られたもので、4体ある像の左端がラムセス2世の像である。この神殿は、1960年代にアスワン・ハイダムの建設で水没し、破壊される恐れがあったため国連(ユネスコ)の全面的なバックアップで、もとあったナイル河岸から約60メートル上の現在の場所に移された。これがきっかけとなって世界遺産という制度が生まれたので有名な遺跡である。

しかし、メソポタミアのところでも触れたように、この頃からエジプトには「海の民」の侵入が断続的に行われるようになり、混乱が再び広がった。彼らはすでにヒッタイト王国を滅亡に追いやっており、その脅威は証明済みであった。しかし新王国はこの撃退に成功し、「海の民」の勢力は壊滅する。「海の民」の一部は地中海東岸に定住し、しだいにその戦闘性を失っていった。エジプトは平和を取り戻した。この地中海東岸に定住した「海の民」の一部ペルシュ族が、聖書に登場するペリシテ人であり、今日イスラエルがあるパレスティナ地方の名の由来となっている。



ツタンカーメン王のマスク



戦車に乗るラムセス2世



アブシンベル神殿

◇地中海東岸の諸民族

ここまで述べてきたようにメソポタミアとエジプトは、初めは異なった文明の地域として出発したが、前2000年代から徐々に文明の融合が進んでいった。この融合に大きな役割を果たしたのが、意外にも少数民族の働きだった。

地中海東岸地方は、文明の始まりのところで述べたように、農業をするのは簡単だが耕地が少なく、人口が少し増えると食料が不足する地域だった。そして隣接するのが二大文明圏のメソポタミアとエジプトである。こうした条件から、この地域に住んでいた民族は、比較的に早くから両文明圏の媒介役を果たすようになった。すなわち商業民族となったのである。

■ アラム人

最も広い地域で活動したのがシリアに住む**アラム人**であった。彼らは**ダマスカス**などの都市を中心に、東はイラン高原から西はエジプトまでの陸上交易を支配し、アラム語はアッシリア帝国時代からアケメネス朝ペルシア帝国時代までは公式の国際共通語となっていた。ヘレニズム時代はその地位をギリシア語に奪われたがそれでも日常的にはオリエントの共通語としてその後も長く使われ続けた。イエス・キリストも、日常的にはアラム語を話していたし、初期の聖書もアラム語で書かれていた。アラム人が使っていた文字はフェニキア文字を改良したアラム文字で、これもエジプトからインドまで広い範囲で使われた。アラム文字はアラム語がすたれた後も、七世紀ササン朝ペルシアの時代まで西アジアの公用文字の座を保ち続け、その座を奪ったのはアラム文字から派生したアラビア文字であった。現在でもアラビア文字は西アジアの公用文字であるし、イスラエルで使われているヘブライ文字やタイのタイ文字はアラム文字の子孫である。



■ フェニキア人

同じく地中海東岸から活躍したのがフェニキア人である。彼らは、ヘブライ人が旧約聖書にカナン人と記述していた集団に含まれていた。カナン人とは、ヘブライ人が現在のイスラエルの地に移住する以前に地中海東岸地域に広く住んでいた人々である。フェニキア人はアラム人とは異なり、海上交易に乗り出して地中海のほぼ全域を自らの活動範囲としていた。**シドン市**や**ティルス市**は彼らの根拠地であり、両市は現在にいたるまで繁栄し続けている（両市は現在ではサイダ市・ティール市と呼ばれている）。彼らはエジプト文字を改良して、史上最古のアルファベットである**フェニキア文字**を発明したことが有名である。ただし最近ではエジプト文字が起源かどうかについて議論があるようだ。アラム文字同様、このフェニキア文字から派生したのがギリシア文字で、さらにこのギリシア文字を変形して作られたのが英語で使っているアルファベットである。



フェニキア系文字。左から、ラテン文字・ギリシア文字・フェニキア文字・ヘブライ文字・アラビア文字

ヘブライ人：紀元1世紀までヘブライ人は外見が似た、同一言語の民族だった。しかしローマ帝国によって故郷から追放され、以後は世界中を放浪する。その後の彼らはユダヤ教徒である事以外、外見も言語にも共通点がなくなった。このため彼らのことをヘブライ人ではなく、ユダヤ人と呼ぶ。

■ ヘブライ人とユダヤ教

以上2つの民族と比べると地味なのがヘブライ人である。彼らは現在**ユダヤ人**と呼ばれている人々の祖先である。彼らは、砂漠地帯から侵入してパレスティナ地方に定住化し、アラム人同様陸上交易に従事した。彼らもアラム文字を改良し、独自のヘブライ文字を作った。しかしその活動範囲はおもにメソポタミアとエジプトの間を中継する程度の小規模なものであった。しか

し彼らが現代に与えた影響は3民族の中では最大である。というのも、彼らの宗教ユダヤ教が元になってキリスト教が生まれたからである。キリスト教の誕生についてはローマ帝国の章で詳しく述べることにする。

ユダヤ教は、本来はオリエントで一般的な多神教であった。それがキリスト教のような一神教となったのは、**モーセ**（**モーゼ**とも言う）の働きが大きい。

当時のエジプトは、中王国滅亡後の混乱を利用してヒクソスが下エジプト地方を支配していたが、ヘブライ人もこの混乱を利用してエジプトに移住していた。しかしヒクソス同様、彼らも新王国によって排除された。モーセは、多くのヘブライ人のエジプト脱出を助け、ヘブライ人はパレスティナの地に移住したのである。ヘブライ人と神との交流が書かれている旧約聖書によれば、彼らは途中何度もエジプト軍に追いつめられた。その際に唯一神**ヤハウェ**（エホバとも言う）がモーセとの間に契約を結び、おかげで危機を脱することができたという。以下の10項目の神との契約こそが「**モーセの十戒**」とよばれるもので、ユダヤ教の根本となるものである。



紅海を割るモーセの奇跡

1. 唯一神ヤハウェのみをただ一人しかいない神として信じること
2. 偶像（神の像）を作ってはならないこと（偶像崇拝の禁止）
3. 神の名をみだりに唱えてはならない
4. 安息日（何もしない日）を守る
5. 父母を敬う
6. 殺人をしてはいけない
7. 姦淫をしてはいけない
8. 盗んではいけない
9. 偽証してはいけない
10. 隣人のものを欲しがってはいけない

ちなみに十戒は、ユダヤ教から派生したキリスト教徒やイスラーム教にも受け継がれており、信仰の基本原則となっているが、ユダヤ教ほどは重視されていない。また唯一神の名は、ユダヤ教徒にとってはヤハウェやエホバだが、キリスト教徒にとってはゴッドやデウスであり、アラブ人にとってはアッラーである。

この「**出エジプト**」とよばれる出来事があった紀元前16世紀頃、ヘブライ人の中でこうした一神教的信仰を持つものは非常に少数だった。しかしこの後ヘブライ人が歴史的な苦難をいくつもくぐり抜ける中、徐々に信奉者が多くなり、紀元前後の頃には多数派になったのである。

こうして生まれたユダヤ教は、唯一神ヤハウェ以外を信仰してはならないことから、当時地中海地域で一般的な多神教信仰に背を向けることになる。これはオリエントで生きる民族としては非常に危険なことであった。というのも、オリエントの諸民族は、しばしば他の民族の支配を受け入れざるを得ないことがある。しかしその際には服従の証として、支配民族の部族神（後で述べるアッシリア帝国ならアッシュール）を自分たちの神殿に祭らねばならず、それが支配民族が被支配民族の精神を支配した証となったのである。

しかしユダヤ教はこれを絶対に認めない、これはつまり支配者の支配を絶対的に受け入れないという「支配拒否宣言」に等しい。支配者からすれば、そのような宣言を受け入れることは普通できない。したがってヘブライ人の運命は、支配者個人の寛容さにかかっていたのである。

移住を開始したヘブライ人は**イスラエル王国**（いまのイスラエルの国名の由来）を建国し、二代目の**ダヴィデ**王は、対立していた先住民ペリシテ人の巨人ゴリアテ（英語でゴライアス）と争って勝ち、パレスティナ（ペリシテ人の地の意味）を支配した。やがてパレスティナ地方に定着したヘブライ人は、陸上交易によって栄えた。紀元前10世紀頃、ダヴィデの子**ソロモン王**の時代には「**ソロモン王の栄華**」という言葉が残るほど繁栄した国家となった。ソロモン王については、当時イスラエルの南方にあって繁栄していた**シバ王国**の女王との交流の話が、聖書に記述されていて有名である。このシバ王国は、現在のエチオピアかイエメンかのいずれかにあったであろうとされているが、確かなことはわかっていない。

しかしソロモン王の死後、イスラエルは内紛によって分裂し、南半分が**ユダ王国**（ユダヤ）として分離した。国としてはイスラエルのほうが大きかったが、国内に部族対立を抱え、政情は不安定だった。ヘブライ人の12の大部族（**十二支族**という）のうち10部族がイスラエルにおり、それが激しく対立したのである。イスラエルは、内部で部族が対立し、対外的にも同族のユダ王国と対立し、その中で国力を消耗した。

やがてイスラエルは、アッシリア帝国が地中海東岸地方に勢力を伸ばしてくると一度はその支配を受入れた。しかしアッシリアが支配下諸民族の反抗を抑えるために強制移住政策をとったため、ヘブライ人も多くが移住させられてしまい、ユダヤ教も抑圧された。このため密かに南方にあるエジプト王国との提携を模索したのだが、これが露見して滅ぼされてしまった。

残ったユダ王国はその後しばらく独立を保ったが、国力は弱いままだった。そしてアッシリアを滅ぼした**新バビロニア王国**（欧米ではカルデア王国とよばれる）の**ネブカドネザル王**によって前6世紀初めに滅ぼされてしまう。この際、反抗した罰として多くの有力者が捕虜として首都のバビロンに連行された（これを聖書で**バビロン捕囚**という）。ただしバビロンでの生活はかなり自由だったようである。またアッシリア同様、新バビロニアが捕囚したのはヘブライ人だけではなくた。

ヘブライ人の捕囚は、その後新バビロニアがアケメネス朝によって滅ぼされる前6世紀半ば過ぎまで約半世紀に及んだ。この間ヘブライ人にはバビロニアの多様な文化が大きく浸透するようになっていったのである。そしてその影響は、ユダヤ教徒の聖典「**旧約聖書**」に色濃く残っている。ちなみに「旧約」とは古い約束という意味で、キリスト教徒が名付けたものである。キリスト教徒にとってはバビロン捕囚の約500年後に作られた**新約聖書**と並ぶ重要な文書であるが、ユダヤ教徒にとっては「旧約聖書」こそが唯一の聖書であり、タナハもしくはミクラーとよばれる。

◇オリエントの統一

■アッシリア帝国

話は「海の民」によってヒッタイトの帝国が滅亡し、エジプト新王国の力が弱まった前12世紀初めに戻る。ヒッタイト帝国は製鉄法を独占し、この国をオリエント最強の地位に押し上げていた。しかし帝国の崩壊によって、技術者はあちこちに散らばっていき、製鉄技術の独占時代は終わってオリエント一体に広まった。人類は鉄器時代に入ったのである。鉄製の武器は、従来の青銅製のものと比べてはるかに硬く、切れがよい。これをだれが最もうまく使いこなすか、それが次の覇者になる条件だった。

約2世紀の間の覇者をめぐる争いを制し、オリエントをはじめて統一したのが**アッシリア帝国**だった。アッシリアは都を**ニネヴェ**に定め、鉄の武器と戦車を駆使した軍事拡張政策と、整備された官僚制度に支えられた中央集権体制によって、徐々に周辺諸国を征服していった。そしてついに前7世紀に、アッシリアはエジプトを征服することに成功した。アッシリアはオリエント地方を初めて統一した国となったのである。

これを実現したのが大王**アッシュル=パニパル**である。彼を含め、多くのアッシリア王は広大な帝国を維持するために、征服した民族から技術者や人質として、多くの人々を首都バビロンなどに強制移住させた。特に有名なのが、先にも述べたヘブライ人の強制移住策である。

しかしアッシュル=パニパル王の死後この国は急速に衰え、わずか20年後には反乱によって滅びてしまう。衰退の原因はいまだによくわかっていない。アッシリアを滅ぼしたのはカルデア人が建てた国、**新バビロニア王国**と東方のメディア王国であった。



■四国分立時代

アッシリア滅亡後、オリエントの覇権を握ったのはこの**新バビロニア**だった。オリエントは再び分裂し、この両国以外に、アナトリア半島では**リディア王国**（世界最古の鑄造貨幣を製作したことで有名）が成立し、エジプト王国も独立を回復した。

こうした諸国は、アッシリアの統治方針を受け継いだ。強力な軍事支配体制と官僚制はもちろんのこと、新バビロニアは強制移住政策まで受け継いでいる。

ネブカドネザル王の時代が新バビロニアの最盛期だった。王は山国出身の王妃を慰めるために、「空中庭園（Hanging Garden 直訳すれば懸架式庭園）」を作らせて緑の多さを演出したとされている。空中庭園は多くの人を驚かせたと言われ、古代の七不思議の一つに数えられている。



■アケメネス朝の統一

新バビロニア王国の覇権も長くは続かなかった。統治方針を受け継いだと言うことは、その長所も短所も受け継いだと言うことである。それは中央政府が機能している限り、うまく広大な領土を統治できる方式だったが、そうでない場合には手に余ったのである。ネブカドネザル死後に短命な国王が続いたため、中央政府は機能しなくなり、王国は彼の死後わずか30年後に滅んでしまう。直接新バビロニアを滅ぼしたのは、メディア王国を滅ぼして独立した新王朝**アケメネス朝ペルシア**のキュロス2世であった。

アケメネス朝：ギリシア語表記であり、古代ペルシア語ではハカーマニシュ朝である。また同様に、キュロスはクルシュ、ダレイオスはダーラヤウである。さらにペルシアとは、彼らの故地ファールス地方のギリシア語の呼称パールスもしくはペルシスから、ギリシア人がつけた名称である。

キュロスは、バビロンに入城すると、すぐ囚われの憂き目にあっていったヘブライ人などの諸民族を解放し、故国に帰ることを許した。このためキュロス2世はヘブライ人から救世主と呼ばれた。アッシリアや新バビロニアと異なったこの寛容政策によって、彼の治世とペルシア帝国の成功が約束された。

そして彼の子のカンビュセス2世の時代には、エジプトまでが征服され、約70年ぶりにオリエント地方が統一された。

ただし、この際彼がエジプトで神官勢力の収入源を没収したことから、エ



ジプトでの彼に関する記述は悪意に満ちたものになり、それをもとにしたギリシア人歴史家のヘロドトスによって、彼は冷酷で狂っており、神のたたりでエジプト征服後に死んだと記述されることになった。

実際のカンビュセスの死は権力闘争の結果らしいが、詳しい事情はよくわからない。このときゾロアスター教の神官が本国で反乱をおこして帝国が混乱したので、王族の一人ダレイオスが立ち上がって鎮圧した。彼こそが後に大王とよばれた**ダレイオス1世**である。ダレイオスはその後、王族の支持をまとめて秩序を回復したばかりか、さらなる領土の拡大にも成功したのである。

彼の真骨頂となったのが、その領土の統治方法であった。彼は地域支配の方法についてはアッシリア方式を採用し、領土全域をいくつかの州に分け、それぞれに知事を派遣した。この知事を**サトラップ**という。つまりこれは彼の独創ではない。独創的なのは、この知事たちを監視する方法だった。それは「**王の目**」とよばれる監察官、そして「**王の耳**」とよばれるスパイを派遣するという方法である。これらが実際どのように運営されたかは不明だが（当然だろう。スパイの実態が記録に残るようではうまく行くはずがない）、うまく機能したようである。

さらにこうした中央集権制度や軍事体制がうまく機能するように、交通・情報伝達の手段が整備された。それが「**王の道**」とよばれる道路網である。首都のササからアナトリア半島の主要都市サルデュスまで全長2400キロの平坦な道路が作られ、この間に111の駅が設けられた。通常九十日間かかる旅程が七日で済ませられるという、いまの高速道路のようなものだった。このとき、同時に昔からの主要道路も整備された。また度量衡（長さや重さといった単位）も全国で統一され、貨幣も統一された（ただし貨幣はまだそれほど使われていなかった）。この後の大帝国は皆これをまねるようになるのである。

さらにダレイオスは**ペルセポリス**という町に新宮殿を作り上げた。この町はいまでは世界遺産にも選定され、観光の名所ともなっているが、その使用目的はいまだによくわかっていない。ちなみに大王は通常は、春は**スサ**、夏には高原の古都**エクパタナ**に滞在し、冬には温暖な**バビロン**に滞在した。

大王やペルシア人は**ゾロアスター教**の信者だったが、その信仰を征服民族に押しつけるようなことはせず、宗教寛容政策をとった。これはキュロス以来の伝統である。ペルシア人はオリエント文化を熱心に吸収し、文字は楔形文字を使用した。公用語は、初期にはイラン高原の共通語が使われたが、後にはオリエント世界の共通語であるアラム語に切替えている。

こうした政策の結果、帝国の領域は広大だったが支配は安定し、その結果、商業が活発化した。サトラップの腐敗や反抗も目立つほどではなく、政治は安定していた。ダレイオス大王の治世であった紀元前六世紀の後半、この大帝国が滅ぼされることなど考えもつかなかっただろう。ましてそれが一人の人物の遠征によるとは。

最後にゾロアスター教について述べておこう。教祖の**ゾロアスター**（ペルシア語ではザラスシュトラ。ド

使用目的:ペルシア軍の
傭兵となった事もあるソ
クラテスの弟子クセノ
フォンが、アケメネス朝
の王は春をスサ、夏を
エクパタナ、冬をバビ
ロンで過ごしたと書いて
いることから、実用で
はない儀式用の都市だ
と思われてきた。しかし
少なくとも建設初期に
は行政がここで行われ
ていた記録がある。

イツ語でツァラトストラ)は実在の人物で、イラン系民族だった。しかし彼がいつ頃生存していたかはいまだ不明で、説によって紀元前15世紀頃から紀元前6世紀まで約1000年の開きがある。

ゾロアスターは古代イラン人の伝統信仰を改革し、二神論的な宗教へと変貌させた。それによれば、世界は主神**アフラ=マズダ**(オルムズドとも言う)によって創世され、主神に従う善神**スプンタ=マンユ**たち(光の属性を持つ)と悪神**アンラ=マンユ**(**アーリマン**ともいう。闇の属性を持つ)の両勢力が、世界の開始から終末まで戦い続けるとされる。人は現世の行いによって死後の運命が決まり、アフラ=マズダの栄光に包まれた天国に行くか、アーリマンの支配する暗黒の世界すなわち地獄に行くかが決まるとされた。

アフラ=マズダの象徴は炎であり、もともと火を崇拝することはなかったが、後に崇拜対象となり、中国での呼称「**拝火教**」となった。

善神と悪神の戦いはいずれ最後の戦い「**最終戦争**」を迎えるが、その時は善神の側が勝利することになっている。その時までには善神は、定期的に救世主や預言者(予言者ではない。神の言葉を預る人)とよばれる人々をこの世に送り出す。さらに最後の戦いの時には、サオシュヤントとよばれる救世主が現われて人々を救うとされた。

こうした光と闇の戦い、救世主や預言者の出現といった要素は、その後の多くの宗教に影響を与えた。たとえばユダヤ教やキリスト教では神と悪魔の最終戦争(ハルマゲドン)、預言者や救世主(ヘブライ語でメシア、英語でキリスト)の出現、天国や地獄、そして最後の審判という形である。仏教へも中国への伝来過程で、浄土や地獄、救世主**マイトレーヤ**(弥勒菩薩)の出現などとして影響した。さらにはこうした宗教を通じ、現在でも多くの小説やゲーム、サブカルチャー(通俗文化)などに影響を与えているのである。

■ペルシア戦争

実はダレイオス1世の即位については、ペルシア国内にはかなりの反発があったらしい。カンビュセスの死の経緯が不明な点からして、もしかすると彼の「即位」自体、王位篡奪だったのかもしれない。このため彼の治世の初期には多くの反乱が起こったが、それらは全てつぶされた。しかしそのうちの数少ない失敗が、ギリシア人との戦争だった。

ペルシアの西端にあるアナトリア半島は、ペルシア以前はリュディア王国が支配していた。半島の沿岸部にはギリシア人都市国家が数多く存在していたが、リュディアは優秀な戦士であるギリシア人傭兵を重宝し、多くのギリシア兵がリュディア軍内にいた。

ペルシアがアナトリア半島を支配したとき、自動的にギリシアとの関係が受け継がれた。当初はギリシア人たちもペルシアの支配権を受け入れていたが、ダレイオス1世の即位はギリシア人たちにとっても心穏やかに受け取れられるものではなかったようである。またダレイオスのギリシア人に対する扱いも、満足するものではなかったようだ。さらにそんな状況の中、ペルシアにとってはギリシア人よりはるかに強敵の、北方の遊牧国家スキタイの陰さえちらついていた。

案の定、ギリシア人はミレトス市を中心に反乱を起こした。ギリシア人都市国家の独立要求という形だった。しかしこの**イオニアの反乱**はダレイオスのすばやい対応で鎮圧された。さらに彼は、不穏な状況を一気に解決するため、スキタイとギリシア人を徹底的に叩くことにした。こうして開始されるのが**ペルシア戦争**である。ただしこれについてはギリシア史と深く関わるため、ギリシアのところで詳しく述べることにする。ここでは結局これは失敗に終わったという結論だけ述べておく。

◇アケメネス朝の滅亡

■マケドニアの台頭

ペルシア戦争は失敗に終わったが、それでも一定の効果はあったようで、ダレイオスとその後継者の政権は安定した。しかしその後、税負担が徐々に重くなったことで、ペルシアに対する反発が少しずつ強まっていった。またペルシア人の領土相続が兄弟均分相続だったため、軍の中核をなしていた貴族層が、代を重ねるごとに窮乏化した。このため表面的には盤石に見えた帝国も内部では弱体化が進んでいた。そこでペルシ

アは力でギリシアを攻めることを避けるようになり、安上がりかつ得意な方法で、つまりギリシア都市にスパイを送り込んで有力者を買収するなど、内政干渉によって反抗の芽をつぶしていくようにした。

ギリシアの側でも、勝利に意気上がるアテネ市が一時期ギリシアの覇権を握るかに見えたが、ペロポネソス戦争の敗北で失速した。その後も覇権を握ろうとする都市が現われたが、ペルシアの妨害もあって全て失敗に終わった。このためギリシア人問題は解決したかに思われ、ペルシア帝国では紀元前4世紀になると平和な時期が続いた。しかしその繁栄は表面だけであり、足元はぐらついていて一突きで倒れるような状態だったのである。

■アレクサンドロスの東方遠征とアケメネス朝の滅亡

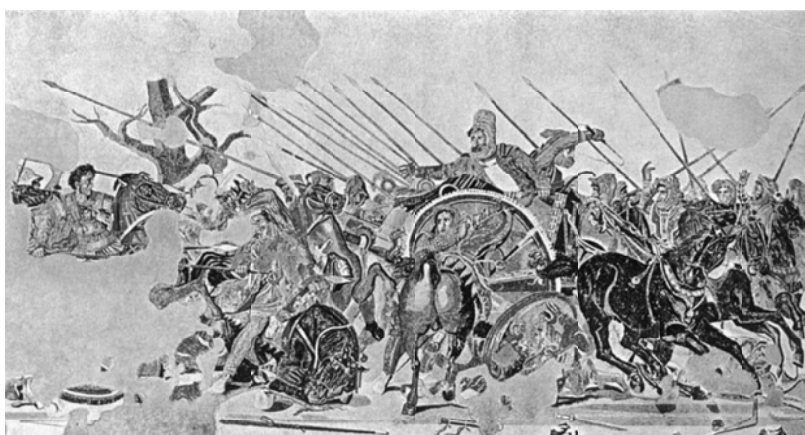
そんな中の紀元前4世紀の終わり頃、突然ギリシアをマケドニア王国の国王**フィリッポス2世**が統一するという事態が起こった。ペルシアにとっては予想外であり、もしかしたら内政干渉策の失敗だったのかも知れない。

フィリッポスの次なる目標は、ギリシアの混乱の元凶、ペルシア遠征であった。しかし彼はその前に暗殺されてしまう。詳しい事情は分からないが、ペルシアが関わっていた可能性もある。彼の息子アレクサンドロスが一见無謀に思える遠征を行った事が証拠だという説は古くから根強い。

その息子、弱冠20才の国王**アレクサンドロス3世**は、即位後間もなく起こったギリシアの反乱をあっという間にねじ伏せると、ただちにペルシア遠征を宣言した。ペルシアにとっては無謀な小僧っ子の挑戦かと思えなかっただろう。

遠征は紀元前334年に開始された。

ペルシアはまず小僧っ子の倍の地方軍4万を差し向けたが、この小僧っ子は、ペルシアの半分の兵であつという間にうち破ってしまった。この結果は風の噂に乗って広まり、ペルシアに驚きと不安が広がった。翌年には穀倉地



イッソスの戦いで逃げるダレイオス3世と追うアレクサンドロス（ボンベイ出土壁画）

帯シリアをのぞむ場所で**イッソスの戦い**が行われたが、この時もアレクサンドロス軍は、皇帝ダレイオス3世が自ら率いた10万を越える大軍を三分の一の兵で打ち破ってしまった。ペルシア軍は総崩れになり、ダレイオス3世は妻子や多くの財宝を置いて逃げ出さざるを得なかった。

この大勝はペルシア帝国に深刻な打撃となった。ペルシアの「絶対の強者」というラベルが剥がれてしまったのである。このためアレクサンドロスがその後エジプトに進攻したときは抵抗が全く無く、エジプト人は彼を解



放者と呼び、ファラオの地位まで提供したくらいだった。

エジプトでしばらく休息した後、体制を整えたアレクサンドロス軍が、再びペルシアに立ち向かってきた。ペルシアは何とか20万～25万とよばれる大軍をかき集めることには成功したが、いざ戦闘が始まると、すぐに大軍の正体が露わになった。詳しい経緯はわからないが、アレクサンドロスの攻撃を受けたペルシア軍は、それだけで総崩れになったのである。ダレイオス3世もすぐに戦場から逃亡した。これで大帝国の運命が決まった。

アレクサンドロス軍はメソポタミアの大平原に戻り、バビロンやスサといった主要都市を制圧し、破壊・掠奪をくり返した。さらに彼は逃亡したダレイオス3世を追跡し、軍を東に進めた。恐怖に駆られたダレイオスは、家臣と共にイラン高原を東に向かって逃亡したが、逃避行に疲れた家臣によって殺害されてしまう。この死によって、古き大帝国は滅んだのである。

そして新しき大帝国、アレクサンドロス帝国が誕生した。彼の意図を汲んで、ギリシアのやり方をもとにオリエントのやり方を組み込んだ、新しい国がオリエントに生まれたように思われた。

ただし実際のアレクサンドロスや後継者のギリシア人支配者たちは、オリエントで実際に行われていた統治方式や文化を重視した。新来の少数派であるギリシア人にとって、先住の大帝国の方式を無視する事など、愚か以外の何ものでもなかったのである。ヘレニズム時代という皮をかぶって、オリエントやペルシアの文化はしっかり生きていたのである。